



わが校の 取り組み・私の工夫

第1回

「校内研修の充実～進路指導を中心に～」

このコーナーでは、進路指導・学習指導などさまざまなテーマで、高校の取り組みや、先生方の工夫を紹介する。

今回のテーマは校内研修。近年、教員の大量退職を迎えて、経験の少ない若手教員の割合が高まっている。また、教員の異動のサイクルが短くなり、校内での指導のノウハウの蓄積・継承が難しくなっている。さらに高大接続改革が進む中で、大学入試に関する新しい知識を獲得したり、次期学習指導要領施行に向けて指導方法を改善する必要も出てきた。こうした背景から校内研修の必要性が高まっている。

そこで、4・5月号では、これらの変化に対応するために、校内研修に力を入れる高校にお話を伺った。なお今回は進路指導に関する取り組みを中心に取材をした。

学年ごとの進路検討会や、文書を活用して進路指導のノウハウの共有を図る岡山県立津山高校、中期ビジョンを意識した進路指導標準プランの作成、大学入試検証会、進路検討会を行うことで教員の目線を合わせ、入試問題研究や外部連携にも取り組む秋田県立秋田南高校の取り組みを紹介する。

Contents

岡山県立津山高等学校	p38
教員間の連携を深め、多彩な話題が展開される 「進路検討会」で進路指導の経験を伝承	
秋田県立秋田南高等学校	p40
「大学入試検証会」「入試問題研究」「外部連携」等 「生徒に第一志望を貫かせる」進路指導を強化	



岡山県立津山高等学校

教員間の連携を深め、多彩な話題が展開される「進路検討会」で進路指導の経験を伝承

岡山県立津山高等学校は、今年創立125年目を迎える伝統校。毎年、東京大、京都大をはじめとする難関大学に合格者を輩出しており、地域社会からの信頼が厚い。文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けて、国際的視野を広げる研修や、学問を追究し、やり抜く力を育てる教育も推進している。

また、近年は、進路検討会などにおいて、これまでの進路指導の経験を共有・継承するための取り組みにも力を入れている。

進路課の國定義憲先生に、その背景と具体的な取り組みの内容を伺った。



國定義憲先生

◇◇◇ 普通科進学校が初めての若手教員は難関大志望の生徒への進路指導が課題に ◇◇◇

國定先生は、進路指導の経験やノウハウの伝承について、近年危機感を覚えているという。

背景には、県立高校教員の異動のサイクルが以前よりも短くなっていることがある。1校7年程度の勤務になり、10年以上同じ高校に勤務して、他の教員の支援をするような教員がいなくなっているという。また、学校規模の縮小も影響している。かつて1学年10クラスだった同校も現在は6クラスに減少。それに伴い教員数が減っていることも、新しく着任した教員の支援などがしにくくなっている要因だという。

「上記に加えて、研修会、勉強会は教科教育関連が中心で、進路指導の方法を勉強する機会は少ないのが実状です。生徒が入学して良かったと満足できる高校であり続けるためには、進路指導に関しても安心できる教員集団であることが重要です。ベテラン教員の経験を共有・継承し、若手教員が育つような組織的な取り組みが大切になります」（國定先生）

では同校の取り組みを紹介しよう。

まず挙げられるのは進路検討会だ。学年ごとに実施し、情報の共有、経験の伝承を図っている。

1年生は7月、10月、3月の3回実施し、生徒の文理選択に向けた指導などについて議論する。

「進路指導というと3年生に目が行きがちですが、実は1年生の指導が最も難しいと考えています。進路について、まだ何も考えていない生徒たちに、文理分けに向けて進路をある程度決定させる必要がありますし、担任は文理に分かれていない多様な関心の生徒たちを全員指導する必要があるからです。ですから、進路検討会の場で、ベテランから若手へ指導の仕方や過去の成功例・失敗例、学部学科に関する知識などを教えることは有益だと考えています」（國定先生）

2年生でも同様に、7月、10月、3月の3回実施される。生徒の現状の学力を見て、志望を実現させるためにどのような指導が必要かを話し合う。対象は主に難関大を志望する生徒だ。進学校が初めての教員は難関大志望者の指導を経験しておらず、指導方法を継承する必要性が高いためだ。

「難関大志望者については、教員自身の受験経験を超えている場合も少なくないため、担任は、学習については

各教科の先生に相談に行くようにとだけ指導してしまいがちです。そうならないように、進路検討会では難関大志望の生徒に有効な指導方法などが議論されています」（國定先生）

3年生の進路検討会は4回実施する。7月は合格に向けての夏休みの過ごしせ方、9月は推薦入試志望者への対応。12月第1週の3日間に行う時は国公立大の第一併願、第二併願と、私立大の出願をある程度明確化し、それを受けて翌週に三者面談を実施する。1月はセンター試験後に行う、出願校についての最終検討である。9月は推薦入試志望者のみだが、7月、12月、1月は全員の進路検討を行う。担任が、一人ひとりの生徒に対して、どのようなアドバイスをしようと考えているかを発表。他の担任や進路課の教員が、この大学・学部も受験候補になるのではないかとといった助言をする。

現在は、このように進めている進路検討会だが、同校では2017年度までの数年間、3年生の進路検討会に、1・2年の担任も加わり、勉強の機会を増やすことを試みた。検討会の前に、ベテランと若手の教員がペアを組んで、一部の生徒について、模擬試験の結果をまとめた資料をもとに受験校の案を出し、一緒に検討した。有意義

＜図＞進路検討会の時期と内容

時期	内容	
1年生	7月	成績上位層・下位層、その他気にかかる生徒を中心に指導方法についての相談・情報共有
	10月	成績上位層・下位層、その他気にかかる生徒を中心に指導方法についての相談・情報共有
	3月	全員の文理選択について確認、指導方法の検討
2年生	7月	成績上位層・下位層、その他気にかかる生徒を中心に指導方法についての相談・情報共有
	10月	成績上位層・下位層、その他気にかかる生徒を中心に指導方法についての相談・情報共有
	3月	全員の文理選択について確認、指導方法の検討
3年生	7月	全員の志望大学の確認、夏休みの過ごし方など指導方法の検討（2日間）
	9月	推薦入試出願者への対応
	12月	全員の併願先・私立大の出願先の検討（3日間）
	1月	全員の第一志望大学の検討

(編集部作成)

な取り組みではあったが、多忙な教員にとっては負担が大きい。そのため、2018年度からは、各学年の進路検討会において、情報の共有、経験の伝承を図る形に戻している。

今後については、教員間の情報共有をより推進したいと考えている。

「教員は自分の専門教科以外の分野については、必ずしも詳しくない面があります。例えば私は生物担当ですが、同じ理系分野でも、工学系学部でどんな学習をするのか、よく分かっていませんでした。幸い、本校はSSHの指定を受けており、理科の教員同士はコミュニケーションの機会が多いこともあって、よく連携が図られています。物理の先生から機械工学、電気工学の学びの内容を聞いたり、ロボットを研究したいのなら、どの大学の研究が充実しているのか、貴重な情報を得たこともあります。

そのため、進路検討会でも、より幅広く教科の枠を超えて教員間の連携を深めて、多様な話題が展開され、情報が共有されて、生徒により有益な助言ができるようになることが理想だと考えています」(國定先生)

進路指導の方法を共有・継承するための取り組みとして、新旧担任連絡会も実施している。旧3年生の学年団から、新3年生の学年団へ、指導方法などについて伝える場だ。旧3年生の学年団からは進路指導の成功例・失敗例を伝えたり、新3年生の学年団からは具体的な生徒の事例を挙げてどのような指導をしたらよいかを相談している。

◇ 「進路十六夜」
◇ 「ちょっと気になる進路の話」
◇ の文書を通じて
◇ 進路指導方法を共有・継承

進路指導の方法の共有・継承にプ

リントなども活用している。

例えば、難関大志望の生徒を指導する方法を伝えるために、難関大指導の流れを各教科でつくり、冊子にまとめて指導に生かしている。

また、「進路十六夜」の活用も行っている。生徒・保護者を対象に、タイムリーな進路情報を提供するプリントで、各学年の進路課教員が書き、それぞれ年間約30回発行している。年度末には、進路課で3学年分を1冊にまとめ、教員に配布している。過去のプリントを読み返すと、時期ごとに生徒に提供すべき情報や、アドバイスした方がいいことなどを確認できるため、指導方法の共有・継承に役立っている。

さらに國定先生は個人的に「ちょっと気になる進路の話」というA5版のプリントも作成し、他の教員に提供している。「進路検討会の話題を広げるきっかけになればと考えています」と、國定先生は語る。

内容は「センター試験の度数分布の見方」「3年冬に生徒の登下校時間がまちまちになる中で、生徒の状況をどう掌握するか」「併願校を探す際に役立つ資料」「自分が訪問した大学の特色」「大学ごとの就職先の特色」「夏休みの学習計画の立てさせ方」など、生徒向けのプリントには掲載できない、教員が進路指導をする際に役立つ多彩な情報を掲載している。配布

枚数は年間100枚以上に及ぶ。若手の先生方にとっては大いに参考になる資料だろう。同校では、これらの資料を生かして、ノウハウの伝承につなげようとしている。

最後に今後の課題について聞いた。

「対象学年にかかわらず、若手の先生の、模擬試験の結果の活用に課題を感じています。偏差値や得点を見て、学力に合った大学を勧めるだけではなく、より細かく結果を見て学習方法を提案できるようになることが大事だと考えています。例えば『小問集合は得点が取れているので、基礎的な学習はできているね。この分野の応用問題につまづきがあるので、～のように学習していこう』というところまで指導できるよう支援していきたいと考えています」(國定先生)

岡山県立津山高等学校

◇所在地：岡山県津山市椿高下62

◇学級編成：[全日制]各学年 理数科1クラス、普通科5クラス

◇生徒数：720名(2019年2月現在)

◇卒業生の進路：2018年3月卒業生 233名

- ・進路：4年制大学214名、短期大学1名、専門学校4名、就職1名、その他13名
- ・合格者の内訳(過年度卒生含む・延数)：国公立大156名、私立大334名、短期大学2名、専門学校9名



秋田県立秋田南高等学校

「大学入試検証会」「入試問題研究」「外部連携」等 「生徒に第一志望を貫かせる」進路指導を強化

秋田県立秋田南高等学校は、毎年、国公立大学に150名前後の合格者を輩出している進学校だ。2015年度に文部科学省のSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受け、2016年度に中高一貫教育校となった。6年間を通して、「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」をめざしている。

進路指導では、「生徒に最後まで第一志望を貫かせる」ことを重視。その意識を教員全体で共有するために、「大学入試検証会」「進路検討会」「入試問題研究」などを実施するとともに、外部と連携した活動も進められている。それぞれの取り組みの内容を、進路指導主事の佐藤幸士先生に伺った。



佐藤幸士先生

◇◇◇「大学入試検証会」に ◇◇◇中等部も含めて全教員が参加 ◇◇◇意識の共有を図る

秋田南高校は2016年度に中期ビジョン（2016～2020年度）を策定し、進路指導の方針を大きく変えた。かつては国公立大学の合格者を増やすことをめざしていたが、現在は「現役生の第一志望大学合格率8割以上、難関大合格者50名以上、医学科合格者5名以上」と目標を掲げている。

その背景について佐藤先生は「以前の進路指導では生徒は自分の実力に見合った国公立大に行ければ満足という意識があったと思います。しかし中高一貫教育校になったこと、SGHの指定を受けグローバルリーダーの育成をめざすようになったことなどをきっかけに、生徒により高い目標を持たせて、その第一志望を最後まで貫かせて、チャレンジさせる進路指導への転換をめざすことにしました。2018年度入試ではSGHの活動をきっかけに海外に関心を持った生徒が海外大学に2名進学するなど、少しずつ成果が出てきたと感じています」と話す。

中期ビジョン達成のための進路指導に変えていくためには全教員の意識共有が不可欠だ。そこで作成したの

が「進路指導標準プラン」だ。中等部から学年別に作成し、月ごとに行事、テスト、全体指導、指導上の留意点がまとめられている<表>。全教員に配付することで目線を合わせた進路指導ができるようにしている。

「大学入試検証会」（4月実施）もリニューアルした。これまで新旧の高3担当の教員だけで実施していたが、中等部も含めて全教員が参加する。そのメリットについて佐藤先生は、「全教員が参加することで、指導の目標が共有されています。大学入試から逆算して、それぞれの担当学年で、生徒の能力をどのように伸ばしていけばよいか、考えるきっかけになっています」と話す。

全教員が参加するとともに大学入試検証会の内容も充実させた。以前は、旧高3の学年団で、進路指導部が決めた項目（指導の際に工夫したこと、成功・失敗したことなど）についてコメントをまとめて、新高3学年団に伝達するだけだったが、現在は、①前年度大学入試の全国的な特徴や、②自校の難関大志望者の入試結果の振り返りも行っている。

「①②は進路指導部が資料をまとめ、解説しています。①は特に若手教員にとっては、全体的な情報を把握することが進路指導の第一歩になるため、

必要だと考えました。②は受験する生徒が多い大学の合格者最低点、不合格者の最高点などをまとめた資料と、卒業生全員の受験校、合否、センター試験の自己採点、模擬試験結果などをまとめた資料の2種類を配付しています。その上で、難関大や医学科を受験した生徒について、担任教員から、どのような指導をして、その結果がどうだったかが報告され、皆で改善すべき点はないかを議論しています」（佐藤先生）

◇◇◇すべての「進路検討会」に ◇◇◇共通するのは ◇◇◇難関大をめざす志の維持を ◇◇◇重視すること

「進路検討会」も中期ビジョンを意識して行っている。高1・2は2回（8月、12月）、高3は3回（4月、9月、11～12月）実施される。高1では職業イメージの養成ができていないか、高3の8月なら部活動を終えて受験勉強にシフトできているかの確認など、その時々でテーマはあるが、すべてに共通するのは、難関大志望者を中心に、志望大学への迷いが生じていないかや、学習状況の把握に重きが置かれていることである。

高3のセンター試験直後の「出願

＜表＞南高進路指導標準プラン（高1）

月	4	5	6
行事	始業式 入学式 PTA 総会	中央地区総体	全県総体 学年 PTA
テスト	学力テスト		第1 回定期考査
全体指導	学年集会 オリエンテーション合宿	GW 課題図書 (SGH など) 進路志望調査① 学力テスト検討会 お勧めの校外活動の紹介	学部学科ガイダンス 文理選択ガイダンス
指導上の 注意点	3教科の担当で1年間の指導の方向性を確認する。 学年部会を複数回行い、方向性を確認する。	学力テストの結果をもとに、難関大志望者への声かけを行う。 課題図書を指定してGWなどに読ませる。 ビブリオバトルの利用。	模擬試験の意義を確認する。 PTA で進学費用について紹介する。 通知表の見方の配付。 オープンキャンパスへ積極的に誘う。

(高校提供資料を元に編集部で作成)

検討会」も、以前は出願校に迷っている生徒を対象に行われていた。現在では、それに加えて、難関大・医学科の志望者についても綿密な検討が実施されている。

「出願検討会は、ベテラン教員の知見を生かすために、学年の枠を超えて全教員で実施しています。これまでの外部模試や校内実力テストの結果などに基づいて、どの入試方式を選択するか、このまま第一志望校へのチャレンジを勧めてよいかなどを検討します」(佐藤先生)

◆**全教員でチームを編成して
入試問題を解き
教科指導力の向上や
定期考査の改善につなげる**

難関大の合格者を増加させるために、「入試問題研究」にも力を注いでいる。「入試問題研究」にも全教員がかかわる。1・2月に誰がどの大学等の問題を解くのか、分担を決め、3月に問題を解いた教員がそれぞれ教科内で発表する。個別試験（東京大、東北大、秋田大、北海道大など）の問題だけでなく、センター試験の問題も解き、教科内で分析している。なお対象大学や方法は教科によって多少異なる。教科ごとに、例えば高1の教員はセンター試験、高2の教員は東北大といった具合にチームを編成する。分析結果は進路指導部がとりまとめて、生徒向け冊子「進路の手引き」に掲載する。

佐藤先生は入試問題研究のメリットについて、「分析を踏まえて、それぞれの問題は一斉授業がよいか、個別添削指導の方が有効かなど、指導方法についても意見交換が行われるため、授業改善につながります。また各教科内で学年の枠を超えて実施す

ることで、高1・2の教員にとっても大学入試の時点でこのような問題を解けるようにするためには今のような力を養う必要があるのか、先を見通した指導が可能になります」と話す。

また、入試問題の傾向を把握して指導に生かすことができることも有意義だという。「2021年度入試に先立ち、センター試験や個別試験にも、思考力を問う問題が見られるようになっていきます。入試問題研究を通じて、今後はますますこうした問題への対応が重要になるという意識が教員の間にも生まれたため、今年度から、全教科の定期考査で配点の5%～10%程度、思考力を問う問題を出すことが決定しています」(佐藤先生)

進路指導力の向上のために外部との連携も活発化している。もともと秋田県には「12高校進路指導連絡協議会」(秋田、秋田南、秋田北、秋田中央、秋田西、大館鳳鳴、能代、大曲、角館、横手、湯沢、本庄の12高校が加盟)があり、年2回、全体会を開催して情報共有を図っている。「チーム秋田」として秋田県全体で難関大の合格実績を伸ばすことが目標だ。

2018年度は、予備校担当者による、秋田県からの東北大進学者を分析した講演を聴いた後、「難関大指導」「推薦入試に向けた指導」などの分科会に分かれて情報交換を行った。

「本校からは進路指導部の教員全員が参加しました。分科会では、他校

の取り組み事例が参考になっています。例えば、低学年から東大オープンなどの模試を受けさせているという話などは、難関大志望者を増やしたい本校としては、大いに刺激になりました」(佐藤先生)

そのほか、予備校等の外部講師による生徒向け講演会も進路指導力の向上につながっているという。

「各時期にどのような学習をすべきかを話してもらうことが多いです。生徒向けの講演ですが、本校の進路指導が実状と乖離していないか再確認したり、新たな指導方法に気づいたりする、貴重な機会になっています」(佐藤先生)

生徒に高い目標を持たせ、合格に導くのは簡単なことではない。これらのような多彩な取り組みを通じて教員の目線を合わせ、進路指導力を高めていくことが重要になるだろう。

秋田県立秋田南高等学校

◆所在地：秋田県秋田市仁井田緑町4-1

◆学級編成：[全日制] 各学年 普通科6クラス

◆生徒数：707名(2018年4月現在)

◆卒業生の進路：2018年3月卒業生 271名

- ・進路：4年制大学205名、短期大学8名、専門学校等6名、その他52名
- ・合格者の内訳(現役生・延数)：国公立大(大学校1名含む)142名、私立大(海外大学9名含む)179名、短期大学9名